

# ペンタサ<sup>®</sup>注腸1gを ご使用されている方へ

より良くご使用頂くために

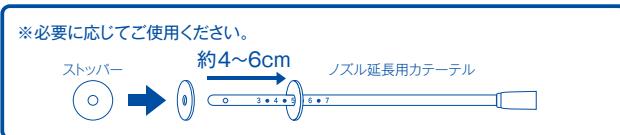
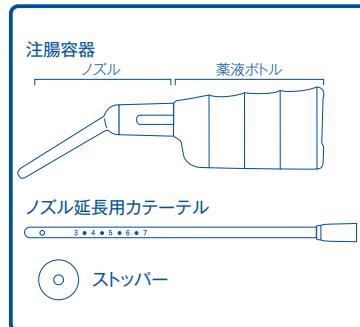
＜医療関係者の方へ＞

本資材は患者さん向けペンタサ<sup>®</sup>注腸1g使用説明書です。  
切り取って、2つに折って患者さんにお渡しください。

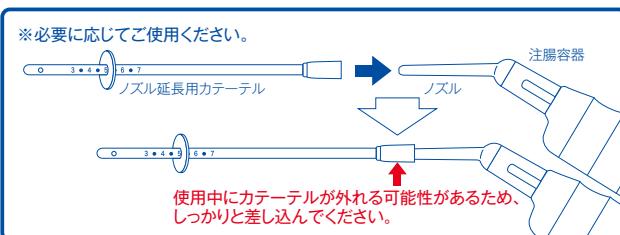
# ペンタサ®注腸1g 使用説明書

●ご使用直前までアルミ袋から取り出さないでください。(本剤の有効成分は光によって変色します。)  
アルミ袋から取り出したものは保存できません。

## ペンタサ®注腸1g製品内容 ノズル延長用カテーテルとストッパーの使い方



- 円盤状のストッパーをノズル延長用カテーテルの先端から4~6cm(目盛4~6)を目安に差し込んでご使用ください。
- カテーテルが肛門内に入りすぎると直腸粘膜を傷つけることがありますので、特に初めてご使用される場合はストッパーをご利用ください。



- ノズル延長用カテーテルを注腸容器のノズルにしっかりと差し込んでください。

## 1 腸を刺激しないために

※必要に応じて行ってください。

- 薬液が冷たいと腸を刺激するがありますので、冬などの室温が低い場合は、適温のお湯につけ、体温程度に温めてご使用ください。

※特に、アルミ袋から容器を取り出して加温する場合は、温度の上がり過ぎにご注意ください。

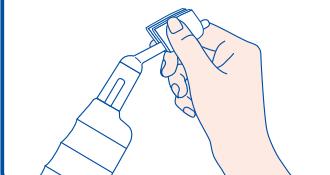
### 参考

注腸剤は、夜間の入浴後や就寝時に使用することが多いため、入浴時にお湯を張ったお風呂に浮かべて加温されている方もいらっしゃいます。手間をかけずに注腸剤を温める方法のひとつです。

## 2 スムーズに挿入するため

※必要に応じて行ってください。

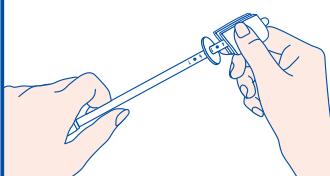
### 注腸容器のみで使用する場合



- 挿入しづらい場合は、ノズルやカテーテルの上部に潤滑剤(ワセリン、オリーブ油等)を塗ってご使用ください。

※カテーテルを使用する場合は、注腸容器のノズルに潤滑剤を塗らないでください。

### カテーテルを使用する場合



## 3 カテーテルの接続



- ノズル延長用カテーテルをご使用される場合は、開栓前に強く差し込んでください。

## 4 注腸液の懸濁



- 容器をよく振って混ぜ、白い懸濁液としてご使用ください。  
※白い沈殿物がお薬です。上澄液だけが先に出てしまうと、お薬がノズルに詰まることがあります。

## 5 容器の開栓



- 容器を軽く包み込むように持ち、ノズルを水平に1回転(360°)させると開栓し、薬液が出るようになります。

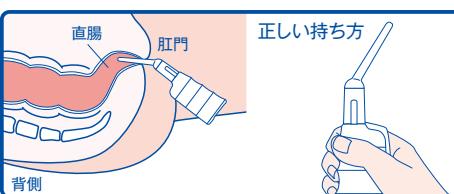
※薬液が出ない場合は、さらにもう1回転してください。

### 【注意】

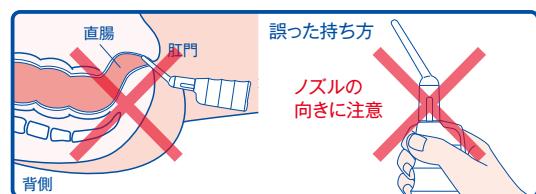
- ◆開栓によりノズルが浮き上ると、薬液ボトルとノズルの間に隙間が生じる原因となります。開栓時に隙間ができた場合は、薬液がこぼれないようにノズルを薬液ボトルに押し込んでください。
- ◆開栓時に容器を強く握りしめると、薬液が飛び出します。それがあるので、強く握りしめないでください。
- ◆まちがって目に入ったり、からだに付着した場合は、水で洗い流してください。それでも何かおかしいと感じたら、医師にご相談ください。
- ◆薬液がシーツや下着などに付着するとしみになります。洗濯するなどすぐに洗い流してください。

## 6 挿入時の容器の持ち方

### ●注腸容器のみで使用する場合

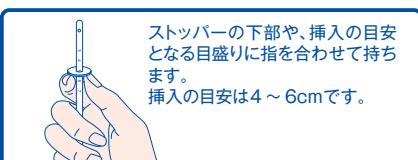


※図のように必ずノズルの先端が手首の方に向くようにしてください。  
慎重にゆっくりと挿入してください。



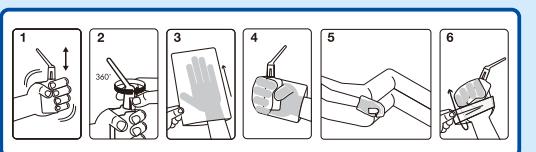
※ノズルの向きが逆になると、挿入時に直腸粘膜を傷つける可能性があります。  
必ず正しく容器を持ってご使用ください。

### ●カテーテルを使用する場合



※上記の持ち方で挿入しづらい場合は、カテーテルの先端を持ってください。

### ●ポリ袋を使用する場合



※薬液がもれる可能性があります。必要に応じて、同封のポリ袋を手にかぶせてご使用ください。

## ⑦挿入時の体位

※必ず左腰を下にして横になって挿入してください。



※立った姿勢やトイレで座った姿勢での挿入は、直腸粘膜を傷つける可能性があります。  
必ず左腰を下にして横になり、ご使用ください。

## ⑧挿入と薬液の注入



- 1 挿入前に、再度、薬液がこぼれないように混ぜて、白い懸濁液としてください。
- 2 左腰を下にした体位で、肛門からノズルまたはカテーテルをゆっくり無理せず慎重に挿入します。  
※ノズルが入る長さには個人差があります。  
無理に挿入すると直腸粘膜を傷つけることがあります。
- 3 容器を握りしめながら、薬液を注入してください。  
(注入時間は1分程度が目安です。)
- 4 注入後、容器を握りしめたまま、ゆっくりと引き抜きます。



※注入時に薬液がもれる可能性があります。必要に応じて防水シートなどを敷いてご使用ください。  
※残液、使用したカテーテル、ストッパーは廃棄し、再利用しないでください。

※体位変換は医師の指示のもと、必要に応じて行ってください。

## ⑨下行結腸（脾回り）まで到達させる体位変換

1. 左 下 薬液を注入後、2~5の体位変換を行ってください。



5. 右 下 最後に、右腰を下にして、1分間静止してください。



2. 腹ばい 腹ばいになり、1分間静止してください。



4. 仰向け 仰向けになり、1分間静止してください。



3. 左 下 再び、左腰を下にして、1分間静止してください。



※体位変換終了後は、楽な姿勢でおやすみください。

指導: 杉野 吉則 先生 (慶應義塾大学病院)

薬液を全量入れるとすぐに排出してしまう場合は、無理せず保持できる液量から開始してください。次第に全量が注入できるようになります。

## ペンタサ®注腸1gを使用される方へ

### ■注腸療法

潰瘍性大腸炎では多くの場合、大腸の下部(直腸～S状結腸)に炎症があり、その炎症は口側に連続性に広がります。

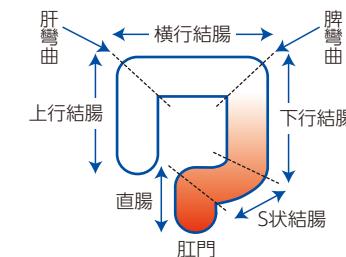
特に大腸下部の炎症は、我慢できない頻回の下痢や、目で見える出血の原因となることが多く、QOL(生活の質)低下の一因となっています。

注腸療法は、肛門から液体の薬を大腸内に注入する治療方法です。この方法は大きく二つの利点があります。

- 下部大腸の炎症部位へ直接薬を届ける確実な方法
- 薬の全身的な悪影響(副作用)をできるだけ避ける投与方法

このような理由から、海外でも潰瘍性大腸炎の治療に使用されています。

### ■大腸の部位とその名称



### ■ご使用前に

1) 事前に排便を済ませておきましょう。

※注腸剤を注入すると便意をもよおすことがあります。

2) 注入した薬液を長時間大腸内に保持(排便せずに維持)するために、日常生活を妨げない入浴後や就寝前などに注入するのが一般的です。

※就寝前に注腸し一晩保持すると、朝の排便時に残った注腸液が排泄されることがあります、特に心配する必要はありません。

3) 薬液を全量注入すると、便意をがまんできなかったり、もれてしまう場合があります。

そのような時は、無理に全量を注入せずに、確実に保持できる量からはじめてください。

※注入直後、全量を排出した場合は、再度、保持できる量だけを注入してください。

一部を排出してしまったり、数時間保持することができなかった場合でも、その日のうちに再度注入する必要はありません。

本剤のご使用にあたりまして、ご不明な点、お気付きの点などがございましたら、主治医の先生または薬局の先生にご相談ください。

杏林製薬株式会社

【お問い合わせ先】杏林製薬株式会社くすり情報センター  
TEL:0120-409341  
受付時間 9:00～17:30(平日のみ)

2 010580 267104  
改訂年月: 2022.11  
PS 0267

